
君だいなり世界

みどり風香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君だいなり世界

【Nコード】

N6280Q

【作者名】

みどり風香

【あらすじ】

大好き。大好き。誰よりも君を愛してる。君のいない世界なんて
いらぬ。君を僕から奪う奴は、みんな、殺してあげる――これは、
狂った少年と狂った少年の、歪んだ、欠けた愛の、物語。

ファーストコンタクト

大好き。大好き。愛してる。誰よりも、何よりも、君が好き。

この世の誰よりも、君を愛してる。君が僕のそばにいるのなら、何もいらぬ。富も名誉もその他の人間も、何にもいらぬ。君がいるから僕の世界は回る。

君のいない世界なんて、世界じゃない。君のいない世界なんていない。

君が一秒でも僕のそばにいないなら、きっと君のこと殺しちゃうよ？

彼はもう、ずっと外の世界から隔離されてきた。保護者の判断により、学校へ通うことは許されていたが、それ以外で家を出ることは長く禁じられてきた。授業が終わると真っ先に家へ戻る。寄り道は許されない。足りないものは、そばに仕えるロククウェル兄弟に言いつけばいいだけで、買い物にも散歩にも行けない。物心ついたときから、そんな生活をしてきたせいで、彼はずっとその生活が当たり前だと思っていた。お付きのロククウェル兄弟と、学校での数少ない友人ナノは根気強く彼に生活のおかしさをこんこんと説くが、どこかしらの感情が少し欠落した彼には、あまり効果がないようだった。

学校の帰り道、ナノはわざとゆったりと歩いた。友人の気遣いに気づくことはない。エミリオはナノの歩調に合わせるだけだ。

「今日も帰るのか」

「うん。心配かけちゃいけないもんね」

「心配ね。あんなのは、ただの束縛じゃないか」

ナノは苦い顔をした。ナノの家族事情も決して良好ではなかったが、エミリオほど露骨なものでもなかった。エミリオを通してロク

クウエル兄弟とも親交があったし、家族事情がよからずともナノは今の生活に不満を抱くことはない。あるとすれば、隣を歩く友人が、あまりに不憫で、さらに不憫なのは、エミリオ本人がそれに何の疑問も持たないことだった。

「心配の形が束縛ってただだよ。愛情に変わりはない」

「ふざけた愛情だ」

「ナノ君、あんまり両親のこと、ひどく言わないでほしいな」

エミリオは心から悲しそうな顔をする。別に、エミリオのことを言ったわけではないのに、ナノはなぜか申し訳がなかった。

「すまない。だけど、僕はお前を心配しているんだ」

「うん。わかるよ。でも大丈夫だから、心配しないでほしい」

「あんまり、無理をするなよ」

「もとより、無理なんてしたことないよ」

エミリオは微笑んで言い返す。なるべくゆっくり歩いたつもりなのに、思ったより早く彼の家に着いてしまった。エミリオは一度振り返って、無邪気にナノへ手を振る。ナノも、振り返す。あんなに無邪気に笑う少年が、どうして保護者のわがままで家に閉じこもっていないければならないのか。親友のはずの自分が、どうして親友一人助けることができないのか。自分の無力さが、結局疎ましかった。

親友が悶々と悩んでいるのも知らないエミリオは、大屋敷の書斎にいた保護者に一声かけ、自分の部屋へ向かう。学校で出された課題をさっさと片付け、そのあとはのんびり本でも読むつもりだった。

巨大だけが取り柄のこの大屋敷に、エミリオは閉じ込められている。学校に行く以外は、絶対に外へ出ることがなかった。課題を終わらせ、本を読む。それ以外にエミリオが自発的にすることはなかったが、不憫に思ったソール・ロックウエルが戯れに銃器の扱いを教えた。その才能は花開いたらしく、教えたソールをも軽く凌駕するほどの腕前だったようだ。

寝室で本を読んでいるエミリオのもとに、ユウヤ・ロックウエルがやって来た。

「リオン、ちょっといいか？」

「うん。どうしたの？」

「実は、庭先の薬草摘むの手伝ってほしいんだけど」

「いいよ。お屋敷の門から外に出なければ問題ないもんね」

「そうだな」

ユウヤはエミリオの主治医としても雇われており、大屋敷の庭を利用して薬草を栽培してもいた。本当は、薬草摘みは表向きで、すきあらば家から出してやろうともくろんでもいた。しかし、どういうわけかこの大屋敷の監視システムは強固で、ユウヤとソール、またナノの力だけではどうにもならなかった。どうにか自由にさせてやりたいと悩むが、当の本人は何も不満がない。というより、不満を抱かせないように歪んだ感情を植えつけられているだけなのだ。

「ねえねえ、どれを摘むの？」

「あ、ああ。その花とこっちの草な。指切らないように気をつけろよ」

「んー」

エミリオは楽しそうに言われたとおりの薬草を摘む。庭の花壇には、ほとんど薬草が植えられている。今が採集の時期であり、ユウヤは慣れた手つきで摘み取る。服が土でまみれるのを、ユウヤもエミリオもためらわない。

夕方直前には、作業は終わっていた。エミリオは一息ついて、汗をぬぐう。

「あ、どうしよう。汚れてると心配かけちゃう」

「平気だよ。寝室に戻って着替えれば問題ない。服は洗濯しとくから」

「ありがとう、ユウヤ兄さん」

エミリオはこっそり、こっそりと、保護者に見つからないように寝室へ隠れ戻った。あんなに、本を読む以外に夢中になったのは初めてだった。こんな風に服が汚れるのも気にせず一心に打ち込める何かがあれば、それは楽しいんだろう。そう思って、打ち消した。

汚したら、保護者が心配する。エミリオにとって、保護者に心配をかけないようなふるまいをするのが、一番だったのだ。

その日、エミリオが外で薬草摘みをしていたのが発覚し、次の日から学校へすら通えなくなった。その責任を問われたユウヤは解雇の危険もあったが、エミリオが保護者に懇願したことでどうにかそれは免れた。しかし、エミリオをさらに閉じ込める結果となってしまう責任を感じ、ユウヤはその日ずっと、エミリオに謝りっぱなしだった。当のエミリオは、別に気にすることもなかった。心配していたのは、課題をどうやって学校へ出そうかというどうでもよさそうなものだった。

次の日、エミリオはすることもなく寝室でのんびりとしていた。寝室に持ち込んだ本はほとんど読み終えたし、ソールの銃器訓練をやるうにも、ソールがいないので無理だった。庭へは出してもらえないが、そこから外へは完全に出してもらえない。日がごくごく経ち、ナノを除く学校関係者からは、エミリオはだんだん記憶から消えていった。ナノだけは、大屋敷の門の前に立ち寄って、そこでエミリオと少しばかりではあるが会話をした。

こうして、少しずつ、少しずつ、エミリオは世間から切り離され、死人のように、誰の気にも止まることがなくなった。

ある日、保護者が家を出ていた。エミリオが外に出て怪我をしないようにとの命令で、ロックウェル兄弟が残された。この状態は、エミリオを外へ出すチャンスだった。二人は早速エミリオに外へ出てみないかと提案する。しかしエミリオは頑として首を縦に振らない。

怒鳴り声に近い声で、ソールは問いたです。

「なんでっ！ あいつらに心配かけるからとか？ そんなこと気になくていいんだぞ？」

「だって、別に外が恋しいわけでもないからさ。それに、僕が言いつけを破って二人に迷惑かけるのは嫌だからさ」

エミリオは未だに、ユウヤにかけてしまった「迷惑」を引きずっているようだった。それを気にしなければならぬのは、ユウヤであるのに。

「あのさ、こないだのことは、もう気にしないでいいんだ。いや、むしろソレはリオンの台詞だろ」

「でも平気。……あ、それじゃ、本が読みたい。書斎の本はみんな読んじゃって、退屈なんだ。何か、おもしろそうな本、持ってきてくれないかな」

エミリオは、自分の自由に欲を見出さない。この広い牢獄で楽しく暮らすことに思考する。

「僕は家から出ないから、大丈夫。なんなら、鍵でもかけとく？」

ロックウェル兄弟は、自分のことではないのに、胸がぎゅうっと締めつけられる思いだった。他の人間よりはエミリオと親しくなった自負があったから、信頼して外へ出る勇気を出してくれたらと願った。だが叶わなかった。エミリオにとって、一番なのは保護者の安心なのだ。

ソールは耐え切れなくなって、エミリオを抱きしめた。

「わっ、わっ？ なになに？ どうしたの」

「いや、お前……えらいよ」

「いきなりなんなのさ」

ロックウェル兄弟は、エミリオに頼まれた通り、本を求めて外へ出た。

大屋敷の中に、自分一人だけが取り残されると、エミリオは寂しさではなく退屈を実感した。書斎にあった本の中には、もう一度読もうと思わせるほどの本はなかった。学校も実質退学したようなものだから、課題に悩まされることもない。

庭の薬草でも眺めるかと思ひ立ち、部屋を出た。

庭へ足を踏み入れた直後、門の向こうで激しい爆音が轟いた。エミリオは一瞬身をすくめた。中に入って避難すべきかと瞬時に判断

したが、できなかった。恐怖に襲われ足がすくんだわけではない。爆風によって砂が巻き上がり、視界が悪くなったがそれも数秒で終わる。その晴れた向こう側に、たった一人だけ、倒れている人間がいたのだ。

避難するどころか、エミリオはそれに近づいた。その者と面識があるわけではない。そこに平穏を乱す輩がいるかも知れない。それなのに、エミリオは彼に吸い寄せられるように、彼に近づいた。

ロックウエルに、ナノに、出る出るとしつこいほど言われても一歩として外へ出なかったのに、その倒れている者に来いと言われてもないのに、エミリオは、生まれて初めて、自らその門を開いた。門の外には、この国の人間ではない、自分と同じ年ほどの少年が、血と砂にまみれて仰向けに倒れていた。息はある。まだ死んではない。左手には、鞘に収められた剣が握られている。艶のある黒髪が、印象的だった。

そつと、手を出す。その髪に触れてみた。

(きれい)

次に、肩に手を置いた。

「だ、大丈夫？」

答える余裕もなく、彼は呼吸する。エミリオは何も考えなかった。外に出てしまったことも、ロックウエルや保護者のことも、爆音のことも、何も。

ただ、どういうわけか、この少年を助けなければ、としか頭になかった。

エミリオは何とかして彼を背負い、屋敷の中へ連れて行った。

「大丈夫？　すぐに手当てするから、死んじやだめだよ」

背負った少年は、重かった。運動は多少しているものの、力のないエミリオにとって、自分の部屋までがずっと遠く感じた。いつも歩き慣れている廊下が、遠く険しかった。

かくして、エミリオは、異国の少年と、出逢ってしまった。

ファーストコンタクト（後書き）

ついに、ついに……ついにやっちゃいました。かねてから書くぞ書くぞと意気込み、かなり時間をかけてじっくりお話を考えていたヤンデレ×ヤンデレもの！

一応ハッピーエンドを目指すつもりです。もとよりこのお話はヤンデレにハッピーエンドはあるのかという疑問から生まれたものであります。最後まで、どうぞごゆっくりおつきあい下さいませ。

異国の旅人

エミリオは、ユウヤに治療された経験がほとんどない。それも、保護者が厳しく監視しているためである。あんなに鋭い目を向けられれば、誰も危険を冒そうと思わない。君子危うきに近寄らず、を、エミリオはきちんと実行していた。

しかし、大屋敷の書斎にある本の中には、応急処置の知識が書かれたものもある。その知識を記憶から引っ張り出して、エミリオは異国の少年に生かした。

傷だらけで、服も汚れていた少年を、エミリオはとりあえず自分のベッドに寝かせた。どの傷も消毒し、きちんとした処置をしたので、恐らく命に関わることはないだろう。血と砂で汚れていた服は脱がせて、ソールのお古をクローゼットの奥から引っ張り出した。自分とはサイズが合わない。服は、ユウヤに頼んで洗ってもらうことにした。

少年の持っていた剣にも、興味を持った。エミリオの祖国・ニーベルング王国にも剣はあるし、礼式として用いられているため、剣を知らないわけではない。ただ、彼の持つ剣は、ニーベルングのものとは違う。

（ちょっと、気になるなあ）

手に持ってみる。結構、重い。彼は、これを手にしながら生活しているのだろうか。鞘から、抜いてみる。

血に濡れ、刃こぼれも激しい刀身が、鈍く光る。さっきまで、エミリオの想像を遙かに超えるような荒い戦闘が繰り広げられていたんだろう。自分の命を、この剣ひとりで守ってきたのだ。

（すごいな）

世間から離れ、保護者によって社会的に殺されたエミリオには、彼の人生がよくわからない。

だが、接点のないこの少年が倒れているのを見て、どうしても放

置しておけなかったのは確かだった。この少年を知っているわけではない。境遇も祖国も違うのだ。そんな人と面識を持つなんて、保護者が黙っていない。

(……両親?)

ここでもうやく、エミリオは保護者を思い出した。傷だらけ血だらけ砂だらけの彼を背負ってここまで運んだために、廊下は血で染められているし、自分もまた、彼の流した血で衣服を汚していた。きつと、保護者はこれを見て更にエミリオを奥へ閉じ込める。

(なんで、おもいつかなかったのかな)

正直、叱られたり閉じ込められたりしてもどうでもいいのだが、そうするとロックウェル兄弟に責任がいつてしまう。それはまずい。あまりによくはない。服はこっそり洗えばいいが、とりあえず廊下はなんとかしなくては。

そう思い、すくつと立ち上がる。と、同時に、倒れていた異国の少年が、目を覚ましたようだった。

「……う」

「あ」

エミリオはベッドへ振り向く。その少年と、目が合った。

「お？」

「目、覚めた？」

「あれ……？」

「僕のお屋敷の前で倒れてたの。なんかほっとけなくて、勝手に手当てしちゃったけど、放置の方がよかったかな」

「いや、ありがてえ。助かった」

少年はゆっくり上半身を起こすと、エミリオの後ろに置かれた武器に反応した。

「疾風^{はやて}」

「あの、剣の名前？」

「ああ。しかし、なんで鞘から抜けてんだ？」

彼の表情は驚愕一色だった。自分ではない誰かが抜いたと考えれ

ば、それほど驚くことではないだろう。

「あ、忘れてた。ごめん、気になったから、つい抜いちゃった」
少年はきりっとつり上がった目を見開いて、少年を見つめる。

「抜けたのか？」

「うん。重かったけど」

「んな馬鹿な……」

少年は「嘘だろ」とか「ありえねえ」とか独り言を呟いていた。

「ちょっと部屋を出る。まだ傷は治ってないから、ゆっくり休んで
て」

エミリオは鞘に刀身を戻し、廊下に出る。

「うーん、どうしたもんか」

廊下の血を、全部消すにはどうしたらいいんだろう。書斎の本には、そんなのなかった気がする。これがバレたら確実にロックウェル兄弟は社会的に抹殺され、生き地獄を味わうことになる。エミリオの保護者によって。

「ただいまー、……ってどわああああ！？」 なんっじゃこの血はあ

あああ！？」

「リオーン！！ いるか！？」

このときばかりは、この二人が早く帰って来てくれて助かったと思っ
った。

「いるよー」

「リオーン！ あーよかった！ 生きてるよな！？ 怪我してなよな
！？」

「うん。この通り」

この二人は、首にされるとか社会的に報復を受けるとかの心配な
どまったくしてない。純粹に、エミリオの身を案じているだけだ。
「えーっと、わけは後で話すから、廊下の血を消すの手伝って欲し
いな」

その後、ユウヤとソールの尽力により、血に汚れた廊下は元通り

になった。二人の苦勞に感謝し、エミリオは二人を部屋に連れて行った。そこに、倒れていた異国の少年が、大人しくエミリオのベッドで休んでいた。

「見たところ、千歳の間人だと思ふんだが」

ユウヤは少年の黒髪と肌を見て明確に言い当てた。言葉は通じるようで、少年は頷いた。

「しかし、なんでまたこんなことになったんだあ？」

「うん。僕も知りたいな」

珍しく、エミリオは知りたがる。少年は一言、

「ちよつと、めんどくせー連中に追われてたんだ」と答えた。

「そっか。……あ、忘れてた」

「あ？」

「名前」

エミリオは淡々とした声で言う。そう言えば、名前も聞かずに過ぎしてたんだ。

すばる ふじえだすばる
「昂。藤枝昂」

「すばる？ って呼んでいいかな」

少年は黙って頷いた。

「僕はエミリオ・グリニツジ。こっちはソール兄さんとユウヤ兄さん」

「長いからリオンて呼ぶぜ」

呼んでいいか、ではなく、呼ぶ、とな。

「いいよ。兄さん二人にもそう呼ばれてるから」

「兄さんだあ？ 似てねえ」

「そりゃそーだ。俺とユウヤはこのお屋敷に雇われてるだけなの」

「じゃなんで兄さん呼び？」

「……考えたこともなかった」

ロククウェル兄弟は、エミリオにとっては兄のような存在だった。兄弟を知らないエミリオは、二人を兄弟だと認識したのだ。

「とにかく、体、よくなるまでここにいて。あ、でも、この部屋から出ないでもらえると助かる」

「なぜに」

「両親に見つかると、いろいろとマズイから」

昂という少年は、その理由を笑うことはせず、厳粛に頷いてくれた。

かくして、エミリオと昂は、互いの名を知ることとなった。

異国の旅人（後書き）

第二話めです。ようやくと自己紹介が終わりました。
これからどうなるのやらと、作者の私もどきどきです。どきどき。

優しいてのひら

昂という異国の少年は、ニーベルングから遠く離れた極東の島国から来たという。

「千歳ちとせっていつてな、人間と妖怪が手を取り合って仲よく暮らす、どっかおかしな国だ」

エミリオはその話に多少の興味を持った。彼の住むニーベルングでは、人間が人間と手を取り合うことはあっても、人外生物と共生していくという発想を抱くことがない。

「妖怪って、魔物みたいなもの？」

「違う。俺もはっきりした違いは分かんねえんだけど、知り合いの学者見習いが言うには、違うんだって。妖怪は魔物と一緒にされるのが嫌で嫌でたまんねえんだと」

エミリオはうーんと考える。

「で？ リオンはそんなことに興味を持つのか」

「え？ 妖怪と魔物の違いに？」

昂は頷く。

「さあ、よく分からない。今まで、何かに興味を持って熱中したことないから、興味あるのかな」

「おいおい……」

千歳の少年、藤枝昂は、二日いらずで全ての傷を癒した。命に別状はないというものの、かすり傷というには重い類のものだった。それを、すぐに治したのは、ユウヤの腕ではなかった。昂の持っていた、疾風という剣が原因だった。

傷を負っていた昂は、疾風を鞘から抜き、刀身にまとう風を傷口にかざした。すると、その風が穢れを吹き飛ばすように傷をたちまち癒したのだ。昂が言うには、この剣は妖刀という種類の武器で、妖怪によって鍛えられた武器であるという。その刀は持ち主を選び、選んだ主人以外には決して鞘から抜かせない。エミリオが一度、抜

いたことがあったのに対して非常に驚いていたのは、その特徴からだった。妖刀にはもうひとつ特徴がある。刀身にまとう自然が、持ち主の穢れを清めてくれるというもの。昴の国では、血を穢れとして考える。疾風は、その穢れである血を吹き飛ばしてくれたのだ。

もうエミリオやユウヤの力を借りずとも、昴は一人で動けるようになったのだから、わざわざこんな家に滞在する必要もない。にもかかわらず、昴はグリニッジ家の監視をあっさりとかいくぐって、エミリオとこうして会話する日を送っている。

現在は近くの宿で過ごしているらしいが、昼下がりから夕方にかけて、いつもここに来る。エミリオが学校へ行くこともできず、家に閉じ込められている事情を知ってか、退屈を紛らわそうとこうして毎日足を運んでくる。

「昴は、いいの？」

エミリオはベッドに突っ伏する。窓の枠に腰掛けている昴に、聞いた。

「あん？　いいって何が？」

「追われてるって言ってたよね。特定の場所にとどまってるのは危ないんじゃないかな」

「大丈夫だよ。リオンに迷惑はかけないからさ」

「いや、そうじゃなくて……」

ベッドに顔を埋めてうなる。ちゃんと細かく聞くべきだった。

「僕の心配じゃなくて、昴のほう！」

「ああ、平気平気。俺強いから」

「あんなに傷だらけだったのに？」

「それでも、俺は生きてるだろ？」

――何なのその妙にかっこよくて男らしい台詞は。

茶化してそう冷やかそうと空気を吸い込んだが、声を発しはしなかった。昴は明るく微笑む。夕暮れ時の、橙に染まって輝く太陽の後光をその背中に受ける異国の旅人を、エミリオは冗談抜きで美しいと感じた。

絶句した。返す言葉は見つかっているのに、発してくれない。

「……まー、あん時はマジで死ぬかと思ったけど」

昂はがりがりと自分の黒髪をひっかく。

「昂は、強いのか？」

「強いよ。自分の身一つ守くらいには」

昂は左手に握りしめた疾風をエミリオに見せる。

「ガキの頃に、お袋から受け継いだ刀でさ。こいつは、いつも俺の無茶に付き合ってくれた。疾風がいる限り、俺は平気だよ。……はい、リオンの心配はこれで解消っ」と

昂は窓枠から降り、ベッドに頭と両腕を預けておかしい体勢になっているエミリオの頭をぽんと撫でる。華奢で弱々しいエミリオの手とは比べものにならないくらい、大きくてたくましい。エミリオは、父親にだってこんな風に頭を撫でてもらったことはない。ユウヤとソールにはたくさん体を撫でてもらったが、昂のはロックウェル兄弟とは似て非なるものだった。

思わず、エミリオの顔がほころんだ。体の一部の撫でてもらうことの経験はあるが、それを昂にしてもらうのがこんなに嬉しくて気持ちいいものとは思わなかった。自然と笑顔が顔ににじみ出たのは、今が初めてだった。笑顔になるのはいつものことだが、自分の意志で「笑え」と命じていた。自然と浮かぶ笑いは、今までなかった。

昂の右手が、エミリオの頭から離れた。

「あ……」

思わず、名残惜しそうに声を漏らす。どうか、昂に聞かれていますように。

見上げたそこに、昂がかがんでいる。彼のてのひらを注視した。

（まめだらけだ）

エミリオは自分の手のひらを見下ろす。傷一つない、人形のような、手だった。怪我をしないようにとの細心の注意という籠の中で十五年も生きていたのだから、当然と言えば当然。そして何とも思っていないかったのに、今になって自分の手に自信がなくなってきた。

……あつたらどうというものでもないのだけれど。

「ん、どした、リオン？」

昴が、床に行儀悪くぺったり座り込んでいるエミリオと視線を合わせる。覗き込むようにして、顔を近づける。

（うわわわ）

顔を近づけられるのも初めてだった。今日はやたらと初めてを経験するのが多かった。

エミリオはとっさに昴の右手を両手で頼りなく引つつかむ。

「おお？　なんだなんだ」

意図はない。初めてのこと戸惑って、どうすればいいか冷静な判断ができなくなって、反射でこんな行動をしたただけだ。手を掴んでどうするというのが、と、自分に問い詰めたくなった。

「……あ」

直接、手で触れるとなおのことよく分かる。薄く刻まれた傷跡が、修行したのだろうと思わせる手のマメが、たくましいその手に、すべて記されている。手を、まじまじと見つめる。傷跡やマメを、指ですつとなぞった。

「リオン？」

「あ、ごめんね」

「そんなにこの手が珍しいか」

「まあね。だって、ほら。僕の手、小さいしマメもないでしょ？

両親は、この綺麗な手でいて欲しいみたいなんだ。だからさ、ちょっと不思議だなんて」

「……ふうん」

昴は、エミリオの華奢な手を握り返す。空いている左手で、エミリオの頬を撫でる。

「うん？」

「世にも珍しい手だ。存分に味わえ」

昴はかかかと笑う。

「……うん」

昂の左手に、自分の右手を重ねる。左手は、まだ彼の右手を掴んだままだ。

これだけの行為が、自分の心をこれほどまでに満たすとは思わなかった。そして、その満たされた心が具体的に何を感じていたのかも、分かっていなかった。

その心が、感じてはいけない禁忌の感情を抱いていたのにも、無垢なエミリオは気づいていない。

その心が発端となって、取り返しのつかないものを呼び寄せることも、二人の心が歪んで狂っていくのも、まだ、気づかない。

優しいのひら（後書き）

ヤンデレ×ヤンデレ三話めです。

頭をなでなでしてもらうのが好きです。もっとやってーとねだると嫌な顔をされます。ちょっと寂しいです……

認識

ある日突然現れた、昂^{すばる}という旅人は、ある日突然、エミリオの館に来なくなった。

昂が館の監視をかくぐってエミリオの部屋まで辿り着き、エミリオと話をするというのはすでに習慣となっていたためか、エミリオにとっては動揺するしかなかった。この習慣が成立してから、エミリオは自分から部屋の掃除をするようになった。昂が外から持ち込んでくる話を心待ちにしていた。

昂という未知の人間のおかげでか、エミリオはだんだん人間らしい心を覚えるようになった。今までの彼は、両親がすべてであり、彼らのお気に召すような生き方を第一に考えるような、いわば人形だった。それが今となっては、そんなことを考える暇がなくなったのだ。昂の話に期待を抱き、昂にからかわれると顔を真っ赤にしてむくれ、昂に体のどこかを撫でられると無性にうれしさを感じる。ロックウェル兄弟やナノの努力では決して叶わなかったことが、異国の少年によってあっさりと成就した。

「ソール兄さん。昂は？」

エミリオは、部屋のベッドを整えている最中のソールに問うた。

「うん？ 見てないよ。そのうち来るさ」

「そうだね」

エミリオは窓を開け、門を眺めた。いつもなら、この時間帯には必ず来るのに。いつまで経っても、来ない。

「どうしたんだろ」

「あいつにはあいつの都合があるんだよ」

「でも、今までは絶対に来てたのに」

「風邪ひいたとか、追っ手に見つかっちゃったとか、そんな感じかもな」

「うん……」

エミリオは終始、沈んだ表情で一日を過ごした。結局、その日は来なかった。

次の日、また来なかった。エミリオは寝不足を訴え、それでも朝の決まった時間には起きたが、昼食を取った後にベッドにもぐりこんだ。眠れなかった。きつく目を閉じてても、難しい本を読んでも、駄目だった。本を読んでも、内容が頭に入ってこなかった。

その次の日も、昴は来なかった。エミリオは相変わらず寝不足だし、食欲もなかった。大好きな読書もつまらなかった。だんだん、エミリオにとって何もかもがつまらないものに変貌していった。

一週間もすると、エミリオは寝込んだ。ユウヤの診察によれば、体に異常はないとのことだったが、エミリオ本人が体調の悪さを訴えていたので、彼を安静にさせることにした。

「で、具体的にどこが痛いんだ？」

ベッドに横になるエミリオに、ユウヤは聞いた。

「痛いというか……苦しい」

「苦しい？ どこ？」

「……胸かなあ。なんかこう、ぎゅっと締めつけられる感じで、苦しい」

「なるほど。ほかに苦しいところはあるか？」

「ない。胸だけ」

「熱もないんだよな。吐き気とか頭痛はするか？ 腹痛は？」

「どれもなし。胸だけ苦しい。……あと、なんか急に泣きたくなる」

「泣きたくなる？」

「ヘンな言い方だけどさ、胸がぼっかり空いた感じがして、今は何も楽しくない。つまんない。退屈。それに胸はずっと苦しい。これ、どんな病気？」

ユウヤは、理解した。これは医学的な病名を持たない、心の病気だ。エミリオを不安にさせないように、ユウヤは努めて優しく微笑み、彼の額を撫でた。

「それはな、”寂しい”っていうんだよ」

「さびしいってなに？」

「んー、そうだなあ……説明が難しい。いつも一緒にいる人がさ、ある日突然自分の傍から消えちゃうとするだろ。その人は自分にとって、傍にいたのが当たり前だってくらいの人でさ。その人がいなくなつて、初めてその人が自分にとってなくてはならない存在だったって気づいたりする。うーん、つまりな……自分にとっての当たり前が、なくなっちゃうってことだと思うんだ」

「そうになると、胸が苦しくなるの？」

「なるよ。これはとても苦しい。薬で癒せる病気じゃないんだ」

「どうしたら、治るかな」

「当たり前のものが、戻って来たら治る」

「もし戻ってこなかったら？」

「分からないな」

「ユウヤ兄さんでも、わからないことってあるの？」

「そりゃあるさ。俺だって人間だ。万能じゃないからな。……さ、これを飲みな。ぐっすり眠れるよ」

ユウヤはコップ一杯の水をエミリオに差し出す。その中には、睡眠薬が溶かしてあった。水を飲み干してベッドに戻ったエミリオは、すぐに眠った。彼にとっては、久しぶりの深い眠りだった。

――さびしい。これは、さびしい。

両親の人形として生きてきたエミリオは、寂しいという感情を初めて実感した。

今まで輝いて見えた世界が、今は色褪せている。なんでだっけ、と無意識に考えた。無意識の中で思い浮かぶのは、昴という異国の少年ばかりだ。

――あ、そっか。

エミリオは、理解した。

――僕の当たり前、昴だったんだ。

エミリオは、昴のいない世界がいかに寂しいものを、認識した。

認識（後書き）

だんだんと自分の感情に気づいていくリオンです。それにしても今回は昂出て来なかったな……

自覚

苦しい。寂しいという感情なんて、時がたてばすぐに慣れて平気になると、エミリオは考えていた。すぐに、認識の浅さを痛感した。寂しさは、消えていくどころか、かえって強く心に残る。

ユウヤの作った食事は、おいしいはずなのに食べたくない。あれほど熱中していた本の山も、今ではただ無意味に積み上げられた本でしかない。体にたいした異常はないのに、起き上がるのも面倒になってきた。

「ちゃんと食わないと、骨と皮だけになっちまうぞー」

いつまでたってもベッドから抜け出さないエミリオに、ソールが軽い脅し文句でからかってくる。

「……食べたくない」

「わがままはダーメー。一口だけでもいいからさ、食べなさい。昴が戻ってきたときに、リオンがやせてがりがりになってるの見たら悲しむよ」

「じゃ、少しだけ食べる」

エミリオはそのそと起き上がってソールの持ってきた粥に手をつける。スプーンに少しだけすくってちびちびと食べる。

「おいしい」

「だろ？ ユウヤは料理もうまいからな」

「あ、やっぱりこれ作ったのはユウヤ兄さん？ ソール兄さんだったらこうはならないよね」

「なんだよー、言ってくれるじゃねえの」

ソールと他愛ない会話をしつつ、結局のところ全部食べた。エミリオの知らないところで、気づかないところで、どうやら自分はよほど空腹だったらしい。

「ユウヤの作ったもん食って、いっぱい体動かして、ほどほどに勉強してれば、寂しさも紛れるさ」

「忘れることはできないの？」

「オレは忘れ方を知らないんだよな。せいぜい昴が来るまでの時間稼ぎにしかないかな」

「そっか」

こうして、エミリオは寂しさとの上手なつきあい方を学んだ。

相変わらず、昴のいない寂しさは続いたが、前よりも苦しくはなかった。昴は、追われていると言っていた。そのために極東からここへ来た。あのいわゆるつきの武器を持った昴を追う連中のことだ、下っ端をよこすはずがない。きっと昴を困難に陥れるに充足した実力を持った者達を送り込まれている。だが、だからといってそれに屈する昴ではない。短い時間ではあったが、エミリオは昴の強さとたくましさを知る機会に恵まれていた。彼はやましい理由で追われているわけではないと推測した。人との交流を断ち切っていた自分が人間を評価するというのもおかしいものだが、エミリオは直感という当てになるのかわからない根拠を持って昴の人柄を信用していた。何より、門から外へ出ようという気持ちがなかったのに、あのとき――倒れていた昴を見つけたとき――たしかに外へ出なければという気持ちにとらわれた。ロックウェル兄弟やナノにあればと言われても何とも思わなかったのに、昴は見ず知らずの人間なのに、自分は外へ出た。

こんな特別な気持ちを抱かせた昴は、ただものではない。ただし、決して悪い方向に傾くわけではないけれど。

――いつあえるんだろうね。

エミリオは窓から空を見上げていた。雲がどんよりと空に覆われていて、今にも降り出しそうだ。誰に聞かせるわけでもない心中の言葉を、エミリオは手紙に紡ぎ出した。宛名は藤枝昴。住所は書けない。別に届けたいと思ったわけではない。ただ、綴りたかった。

――昴。元気ですか？ 突然こなくなつて、ちょっと動揺してま

す。追われているって聞いたけど、けがとかしてませんか？ 追いつかれてしまいましたか？ 極東に連れ戻されてしまいましたか？ 僕は、昴がそう簡単にやられるひとじゃないってこと、知っています。だから、無事だって信じてます。

実はね、昴と一緒にいる時間がなくなってから、僕は「さびしい」という感情を初めて知りました。胸が苦しくて、苦しくて、ご飯ものどを通らなくて、何をしても楽しくなくなって、こんな寂しさなんて死んじゃえばいいと思ってました。でも、この感情から教えてもらったこともあるんです。なんだかね、僕にとって昴はもう当たり前で、とってもとっても大切なひとだったことを。

寂しさともね、うまく折り合いをつけられるようになったんだよ。だから、最初のうちよりいまは平気かな。寂しいって気持ちを知らなくて間もない頃はどうしていいか分からなかったんだよ。

でもね、会いたいや、やっぱり。僕には、折り合いをつけるだけで精一杯。苦しいのがなくなるわけじゃないから。

昴。僕のこと覚えていたら、お願い。

会いに来て。

「……なに書いてんだろうねえ」

エミリオは便せんを封筒に入れ、机の引き出し奥にしまい込んだ。

自覚（後書き）

また昴が出てこない！ 次くらいに出てきます。

再会

「よう」

エミリオは、ぱっと窓を振り返った。いつの間にか開いていた窓に、土足で足をかけているその男。艶のある黒髪に、吊り上った目、左手には、不思議な力が宿るという武器。

焦がれていた、藤枝昴が、そこにいた。

「す、ばる」

「わり。追手がさあ、いつもよりしぶとくてここに来るまでに時間かかったんだ。本当は毎日行くつもりだったのに。……ごめんな」

昴は窓枠から部屋へ侵入する。申し訳なさそうに手を合わせて軽く頭を下げた。

エミリオは昴の状態に構わず、とたとたと走り寄る。全身全霊込めたタツクルのようなやり方で、昴に抱き着いた。

「昴ううう!!」

「ぐおっ! お前、意外と闘牛に向いてんな……」

エミリオの攻撃は思ったより重く、昴は倒れないように必死に下半身に力を込めた。

「昴、昴、すばるううう……!!」

「おー」

相手を呼ぶために発する名前を、言えなかった分だけここで発散した。昴をがちりと捕まえたエミリオの両腕に、力がこもっている。昴の胸にぐいぐいと顔をうずめた。

「会いたかったよお……」

「俺も」

「昴も?」

「おー。追われてる時もさ、これは正直死ぬなって時がいっぱいあったんだよ。でもリオンに会うまで死ぬかーって根性で切り抜けてきた。あれで人生の半分くらいの根性使い果たしちゃった」

昂はエミリオの頭と背を撫でてあやす。その手つきはどこか手馴れていた。

「会えてよかった。今、なーんか幸せだ」

「僕も！ もういつそこに住んじゃえば？ 追手はみんな僕が殺してあげるから」

「ありがてーけど、追手はねえ、なんか最近やけに強くて多いんですよ。リオンを守りながら追手をぶった斬るのはちょーっと荷が重いな」

「じゃあ、僕も強くなる！ これでも銃の使い方は習ったから。筋がいいって褒められたんだよ」

「そりゃ頼もしい限りで」

割と物騒な話題にもかかわらず、二人の表情はいつもと変わらない。エミリオの笑顔が、若干幼くなっているだけで、それ以外はいつも通りだった。

今のエミリオにとって、昂を追う者は自分と昂を引きはがす敵だという認識があった。昂と離れたくないエミリオは、それを処分したいと幼稚にも本気で思っていた。

昂は、物騒な行動で示そうとするエミリオの愛情に、何の違和感も抱いていなかった。せいぜい追手の攻撃に巻き込む心配を持っているだけだ。

どちらも気づかない。互いに向けている愛情に、ほんの少しだけではあるにせよ、歪みが生じていることに。

再会（後書き）

短っ！！ でもヤンデレ覚醒する一歩手前までできましたよ。やっ
とここまで来ましたよ。やっふう。

覚醒

二人の密会は、割とすぐに発覚した。エミリオの両親は早くに気づいていたらしい。気づいたときになぜ問いたださなかったのかというと、確実な証拠を得るためにずっと泳がせていたのだという。ロックウェル兄弟もそれには気づかなかった。エミリオの密会が円滑に進むために、この兄弟はいろいろと根回しをしていた。間違っても密告はしていない。

その現場をつかんだ両親は、言い逃れできないところを武器にエミリオを処罰するつもりで彼のもとへ来た。

「おまえ、親に隠れてこんな……！」

おもに怒り心頭なのは母親のほうだった。密会のばれた本人はそれほど驚いていない。驚いているといえば驚いているが、何よりも両親至上主義だった自分がここまで冷静でいられることに驚いていた。

「こんな、なに？」

エミリオは落ち着き払った状態で、首をかしげる。

「こんな、どこの馬の骨ともしれない、得体のしれない東洋人につつをぬかして!!」

よくわからないが、昴をあらん限り侮辱しているということは、エミリオには伝わった。

ずっと一緒に、彼とずっと一緒にいたいという願いは、この両親がいる限りかなわない。それ以上に、自分の好きになった人をここまで侮辱されて黙っていられるほど、エミリオは大人ではなかった。むしろ、彼は感情の高ぶりを収める術を知らない子供なみに、幼かった。

だから、彼が最悪の行動に走ってしまうことは、当然。

無意識に、持っていた拳銃の引き金を、恐ろしいほどにためらい

なく、引いた。

乾いた銃声が部屋に、二度響いた。一発は母親に、もう一発は父親に。

肩が少しだけじんじんする。眉間を確実に打ち抜かれた二親は、おそらく即死した。

死体と化したその二人は、バランスを保つ意思も力もなくなり、その場に倒れ伏した。

「だって、昂のことを悪く言うんだもん」

誰に対していいわけなのか、少なくとも生きている人に対してではないだろう。ことの顛末を、昂も、ロックウェル兄弟も見ていた。見ていて、何もできなかった。母親のヒステリーにエミリオが逆上するなんて、誰が予想できたのだろう。ある程度のところまではわかって、一線を越えた行動に走るなんて思ってたなかったのだ。

「でもこれで、心配ないね。邪魔する人、もう動かないもん」

エミリオの無邪気さは、今この場ではただ恐ろしい。青ざめて何もしゃべれない兄弟より、昂のほうがまだ落ち着いていた。

「ねえ、昂。だから一緒に行こう？」

差しのべられた手を、昂は簡単にとった。

「びっくりしたー。お前、筋がいいどころじゃねーぞ。眉間ブチ抜いてんじゃねーか。もうこれ以上強くなったら向かうとこ敵なしだな」

この状態で、昂は笑っている。驚いたのは、エミリオが強行に走ったことではない。彼の、射撃の腕前に感嘆しただけだ。

つまるところ、昂の思考回路も常識人とは一線を越えていたのだ。「あ、兄さんたち。死体は僕が片付けとくから、部屋に飛び散った血とかきれいにしておいてくれるかな」

「え、あ。……片付けて？」

「えー、決まってるでしょ。焼くんだよ。焼却炉で。このままだと

虫とか湧いちゃうじゃん」

まだ放心状態の兄弟を現実に戻したのは、エミリオのおかげかな言動だ。人を二人も殺しておいて、ここまで冷静でいられる弟分が、末恐ろしかった。

「というわけで、昂。これふたつ、焼いたらすぐにでも行こうか」
「おうよ」

ついでに、この狂った弟分に恐れを抱きもせず、平然と会話をこなしてみせるこの男にも一種の恐怖を抱いた。

覚醒（後書き）

ついにヤンデレ覚醒です。長かったー。もう一つの連載と並行したり、次々にぽんぽん思いつくネタを短編にアップして寄り道したり。なるべくこつちを進めたいです。

逃避行

昂を罵倒した、リオンの両親二人は、リオンの怒りを買って命を落とした。しかも葬儀はともに執り行われず、彼らを殺したリオンとその思い人に焼却処分された。浮かばれない話である。

その殺した本人は焼却を終えて荷造りをさっさと済ませると、昂と一緒に屋敷を出て行った。長年世話になったロックウェル兄弟には懇ろに札を述べていた。学校に通っていた時代の友人であるナノには、ロックウェルに伝言を預けた。

なんともあつけない、籠だった。籠の中の鳥だったはずのリオンは、籠を自ら壊して巣立った。

昂の言っていた通り、昂の歩いてきた道は結構な茨道で、道中追っ手に引っ掻き回されることなんて当然だった。むしろ何も無い日のほうが少なく、そんな貴重な日は何かの罠かと疑わせるほどだった。

そんな面倒な道でも、リオンはそれを気にしなかった。昂とずっと一緒にいられるならば、歩いている道が茨の道であろうと炎の道であろうと彼は頓着しないのだ。

「すげ」

昂は足元を見下して感嘆した。周囲には追っ手の死体がごろごろしている。三分の二は銃殺。リオンによって殺された。本来追われている昂が追っ手をやらねばならないのだが、昂と自分を引き離す者は誰であろうと許さない主義のリオンが神速でほとんどを打ちのめした。狙いも外れていない。狙撃の才能でもあるんじゃないかなるか。

「昂、けがはない？」

返り血をとどころ浴びているリオンはまったくの無傷で、この場に不似合な無邪気そうな笑顔で昂を見上げてきた。

「おー、おかげさんでな。ていうかなんか複雑だ……」

「なんで？」

「これじゃヒモみてーじゃねえか。自分の厄介をお前にまかせちま
つてよ」

「気にしないで。昴と一緒にいるためなら、どんな苦勞だってどん
とこいだもん」

「ありがてえわ。でも次からはせめて半分残しといってくれよ？ 男
としてなんか面目がたたん」

「ん。昴がそういうなら」

そうして二人は死体の山から下りる。
手が、しっかりとつながっていた。

逃避行（後書き）

短い！ 今のところ、連載はこれ一本なので集中できるかなあ。
最後まで読んでくださりありがとうございます！

監禁

あたりが、暗い。たぶん、廃墟になった建物の中だろう。エミリオはうずくまって寂しさを紛らわせていた。

閉じ込められるのなんて、慣れている。強がりではなく、本当に。ただつらいのは、そばに昴がいないこと。きっと、今頃、追手と凄惨な戦闘をしているんだろう。好きな人の一大事に、自分がいないことが嫌だった。エミリオも、戦闘経験は浅いにしろ、銃撃に關してだけは一級品だった。二人で戦えば、きっとなんとかなる。そう説得した。

でも駄目だった。

追手がいきなり強くなるなんて、反則だ。今までは昴の足元にも及ばなかったくせに、大將は追手をいつの間にか強靱にしておいたらしい。もちろん、そんな程度でやられるわけもなく、二人は善戦したつもりだ。

だが、ここで初めて追い込まれた。相手の数と質が上等すぎた。単純な数からして、勝てるはずもなかった。

たぶん、修羅場をなんども潜り抜けてきた昴は正攻法での勝ち目がないことをわかつていた。だから、エミリオをとっさの判断でここに監禁した。

帰ってくるまで、おとなしくしてると、念を押されもした。それを破ったくらいで絶交するような昴ではない。が、昴の頼みとあれば、それを受け入れなければならないのも確かなのだ。

昴との約束というか頼みのようなものを、自分一人が破っていないわけないのだ。

でも、一番近くにいて彼を助けたいのも本心だった。エミリオは、ずっとそうして矛盾した心と葛藤していた。

「早く、追手が全滅すればいいのに……暴風に巻き込まれるとかして」

エミリオはすねたようにつぶやいた。実際、そう願ったところではかなうはずないのは痛いほどにわかる。

「暴風だけじゃダメかな。しぶといから。……うーん、悪魔にでも捧げたらいいのかな」

建物の崩れかけた窓から、光が差し込む。月の光が、廃墟内を淡く照らしてくれていた。もう、夜だったのだ。

そういえば、昂が自分をここに監禁して出て行ったのが昼ごろ。もう帰ってきてもいいはずなのに。

……もしかして、捕まっちゃった？

不安でつぶれそうになる胸を、エミリオは落ち着かせる。

出ていくとき、昂はなんていった？

「大丈夫。すぐ帰ってくるさ」

すぐっていつなんだろう。夜が明けてもすぐのうちに入るのだろうか。

エミリオは膝に顔をうずめた。ただ守られるだけじゃなく、守りたい。なのに、それすら許してくれないなんて、少しだけ昂が恨めしい。

「僕だって、強いんだよ」

昂や追手ほどには遠く及ばないが、昂の敵を撃ち殺すくらいには、強いんだ。だが、いまさらそれを毒づいたって、昂が聞いてくれるはずもない。彼はこの場にいないのだから。

神様、いるなら助けて。

あの人を、死なせないで。

神様なんて教義上の産物だとは思っていなかった自分が救いを

求めるのも都合がよくておかしい話だ。だけど、エミリオは本気で祈った。

僕の代わりに、あの人を守って。

神を描いた絵画も彫刻もない。その代わりに、エミリオは月にひたすら祈っていた。

監禁（後書き）

どこまでいくんだろうこのシリーズ。そろそろ佳境かと思うのですが、エンディングが多すぎてわけわからなくなりそうです。作者なのに。

満身創痍

ああ、こりゃ結構やばいな。

昂は、強がりではなく、本気でそんな弱音を心中で吐いた。自分を狙ってくる追手が、自分の手に負えなくなってきた。

自分を何としても実家に戻そうとする親玉は、それほど自分を欲しているらしい。不義の子でありながら、正妻に子宝が恵まれなかったばかりに、後を継ぐ羽目になった自分には、よっぽど価値があるらしい。

昂は、家を継ぐ資格のある自分に価値があるとは思っていなかった。家にそれほど魅力を感じてもないし、誰かの意思を引き継ぐなんてがらではないのだ。人の上に立ってリーダーシップを発揮するような性格でもない。自由に、奔放に、不特定多数の人々のために尽くすほうが向いている。

だから、自分に価値はないと思っていた、異国で出会った、自分と似た少年に助けられるまでは。

少年に命を救われてからは、恩人として気にかけていた。家から出てはいけないことを知ってからは、自分の都合をつぶしてでもあの子に会いに家へ忍び込んだ。追手が強くなってあの子の家に行けなくなっただけから、寂しさを覚えた。

あの子が、自分に価値を見出してくれた気がするのだ。錯覚でも構わない。少しでも長く、あの子と一緒にいられるなら、追手に毎度のことを手を煩わされるのなんて苦にもならない。

どんなに屈辱的なことをされたって、自ら命を絶つことなんて考えも及ばない。

生まれる前から自分を守ってくれていた愛刀を、握る手に力を込める。この刀は居合に向いている。抜きざま、刀身にまとった風が刃となって敵を斬るのだ。

しかもこの刀は、日付が変わると、どれほど刃こぼれしようとして折れようと、たちまちもとの刀に戻ってくれる。おかげで武器代が浮いて助かっていた。

この刀と一緒にならば、どんな敵も倒せると信じている。

だが、弱音を吐きたいのも本当だった。

相手は、質も量も優れていた。自分も腕に覚えはあったが、相手がそのずつと上を行っているのだ。

この敵に、あの子を傷つけさせまいと、とっさに近くの廃墟に放り込んで身動きとれないようにさせたが、正解だった。

相手は自分が目当てなのだ。それだけであって、昂の隣にいる彼の命はあってもなくてもいいんだろう。

あの子も強いことは強い。だが、決定的に経験が浅い。それではすぐに相手にやられる。

「弱音を吐くとは、らしくもなくなっちゃったなあ、疾風」

昂は愛刀疾風にそう話しかけた。疾風は声を発することはない。だが、手から、疾風が何かしら返答をしてくれたのはわかる。

「わかってるさ。ここでくたばりはしない。俺がいないと、大泣きする甘えん坊が、廃墟で待ってるんだからよお」

力を振り絞って、抜刀する。

風が刃となって、昂を取り囲んでいた敵を斬り刻む。この攻撃に学習したのか、相手も防御と回避を覚えていたようだ。何人かは確実に仕留めたが、殲滅できていない。

「げ」

昂は絶望寸前の表情を浮かばせる。残っている追手らは、全員魔法の力によって疾風の力を掻き消していたらしい。判断が鈍った。出血がひどくて頭に靄が広がっている感覚がする。そのせいか、自分が魔法によって拘束されていたことに気づくのが遅れた。

昂は、銃器や刃物といった物理的なものに対して打たれ強い代わりに、魔法にはてんで無防備な体質を持っている。疾風で自分を拘束する鎖を断ち切ることはできない。が、弱っている自分と刃こぼれが半端ではない疾風で、幾重にも嚴重に縛り上げた鎖をすべてぶつ斬るのは無理だ。

魔法に弱い昂自身のみでこれから逃れるのは、不可能だ。とどろつまり、まともに身動きできない状態で、この後に魔法でもぶつ放されたら、昂の命は一瞬で散る、塵も残さずに。

「つくそ」

何とか逃れようと身をよじっても、鎖はほどけない。むしろだんだんきつくなっていく。

残った相手は全員、魔法を放つ準備をしている。それほど魔法に詳しいわけではないが、魔法陣やつぶやいている言葉からして、自分を殺すには十分な魔法なのは確かだろう。

死ぬ。これを食らったら、間違いなく死ぬ。

四方八方から、青白い閃光が放たれる。それはどれも、自分に向かって確実に走る。

歯を食いしばって、前方の追手を、これ以上ないほど睨みつけた。それで形勢が逆転するはずがないのはわかっていても、最後の悪あがきをせずに終わるのは、性格が許さなかった。

直前、何かが、自分を力強く包んだ気がした。その直後、自分は何かに突き飛ばされたかのように地面に打ち付けられた。とっさに

受け身をとったが、自分の腹上に人が乗っているためか、背を打ち付けた衝撃は通常の倍ほどは感じられた。

思わず咳き込む。次いで、確認した。

魔法も、拘束も、消えている。自分の命は、つながっている。

「なんで……？　生きてる？」

答えは、すぐに見つかった。

自分にのしかかっている、華奢な少年が、昴を救ったのだ。

満身創痍（後書き）

どんどん物語は終わりへ近づいている……といいな。ヤンデレ×ヤンデレから思いついたお話ですが、もう終盤に入ろうとしています、たぶん。最後の最後で、どっちも究極のヤンデレになればいいよ。

彼らの大敵

「昴、大丈夫？」

いとしいあの子は、今にも泣きそうな顔で、そう聞いてきた。そんなことは、こっちが問い詰めたい。出てくるなといったのに、出しゃばって。この、大馬鹿。

だが、怒る気にはならなかった。結局、この子の無茶も命知らずの行動も、いとしく思えてしまうのだ。

「バカ、お前だって危なかったのに」

「ごめんね。昴が危ないのに、自分だけ安全な場所で祈ってるだけなんて、やっぱり駄目だった」

「そっか。……手枷、引きちぎったのか？」

「うん。銃でぶっ飛ばすのが早かったんだけどね。昴を傷つけるやつらのために、一発でも多く残しておきたかったから」

そういつて、エミリオは笑って両手首を昴に見せた。見事に赤黒く染まっていた。昴は、その手首に口づけた。

「痛かったろ？」

「痛くないよ」

エミリオは、自らの体を張って、追手の放った魔法をすべて打ち消した。

人間なら誰しも、魔法に関するものの影響を受ける。攻撃に使われるものならもちろんダメージを少なからず受ける。人間の身体構造はそういった出来なのだ。

それを、エミリオは破った。彼が人外生物だからではない。彼は、おそらく人類唯一の魔法を受け付けない人間なのだ。本人は、その重大さがわかっていない。せいぜい、この特質を利用して自分が昴の盾になれるという安直な考えだけだ。

「魔法が効かないなら、あとは僕の独断場だね」

「リオン……？」

「ごめんね、昂。またおいしいとこだけ持ってっちゃうけど、今回だけは、おあいこね」

エミリオはそのまま拳銃一丁だけを持って、敵地に突っ込んだ。敵たちは魔法を連発するが、体力を無駄に消費するだけで終わった。銃で撃つならさっきの場所からでも、エミリオほどの腕前なら確実に倒せる。が、エミリオがあえて距離を縮めたのは、敵に対する大きすぎた憎悪が原因だった。

いとしいあの人を傷つけ、殺そうとしていた者たちに情けをかけられるほど、エミリオは正常な人間ではなかった。少しでも無残に殺してやりたい衝動に駆られていた。それを止められるものは、おそらくいない。無残に命を削られ、最後の一片を食われるまで、その憎悪は消えないのだ。

昂が加勢するまでもなく、敵は全員エミリオによって無残に殺された。最後の一人の最後の命まで、エミリオは容赦なく削り取っていた。

「昂！」

昂のもとへ戻ってきた殺人鬼は、もとの少年にと戻った。

「大丈夫？」

「バカ。そりゃこっちのセリフだ。ったく、いくら魔法が効かないからって無茶しやがって」

「ごめんね。でもさ、昂が危ないって思ったら、いてもたってもいられなくなって。その気持ち、昂ならわかるでしょう？」

「まーな。でも、これからはお互い危ないことはなるべく避けて行こうや」

「昂がそういうなら」

今いる追手をすべて片付けた二人は、ひとまず先ほどの廃墟に戻

って一晩明かした。

朝を迎えて頭がすっきりしたためか、二人とも利口になっていた。もつとも、短絡的な行動に結びつくのは相変わらずではあったが。

「あのさ、これ以上危ない目に遭わないためにはさ、元を絶てばいいと思うんだよね」

「というど？」

「昴の追手の親玉を、この手で完膚なきまでにぶっ潰しちゃえばいいんだよ」

無邪気な笑顔で言うようなことではないが、エミリオは本気だった。

「なるほどなあ。でも、遠いぞ？　ここは西の果ての島だろ？　俺の故郷は極東の島だ」

「大丈夫！　昴を守るためなら、手間も時間も惜しまないって」

「そうはいっても、こっちは二人だもんなあ。あっちだってそれなりの戦力は持つてるだろうし……」

「問題ないよ。死にそうになったら、迷わず僕を盾にして。こんな貧相な体でも、昴の盾にはなれる」

エミリオの言葉に迷いは微塵も含まれていなかった。盾というのは比喻ではない。文字通り、彼の身代わりに死ぬことだってかまわなかった。

「お前な……」

昴はあきれてエミリオの頭を小突いた。

「もし俺の盾になって、それで死んじまったら、もう一緒にいられなくなるんだぞ？」

「あ、そっか。じゃあ、死なないように頑張るから、親玉を殺しにいう？」　僕と昴ならできるよ」

「じゃあ、約束だぞ？　お互いに、絶対、死なないこと。いいな？」
エミリオは力強くうなずいた。

かくして、狂った二人は敵の大將をつぶすため、昂の故郷である国へと赴いた。相手側も二人だけで敵陣に乗り込むとは思っていなかったらしく、彼らを負傷させるのは至難の業となった。親玉はそれなりに強かったが、心の歪んだ二人にはまるでかなわず、首を取られることになった。

この事件は国内で大きく取り扱われた。国の警察組織が全力を挙げて彼らをとっ捕まえんとつとめた。多くの犠牲を代償に、二人を確保することは一応はかなった。当然死刑。

しかし、二人は一緒に死ねないとわかると脱走や殺人を繰り返し、逃亡のたびに警察に捕まった。死刑を決め込まれているのはわかっているから、全力で脱走した。その繰り返しだった。

これ以上の犠牲を払うわけにはいかないと、警察組織は彼らをまた捕まえた。刑罰は死刑ではなかった。

二人を、誰もいない、何もない孤島に流すことに決めた。その孤島は、国から遠く離れていたし、船も出ていないようなところなので、彼らをそこに放り出せば国は安全だと悟ったのだ。彼らが本島へ来るとは思わない。二人は、お互いさえいればそれでいいというある種歪んだ愛情でできている。そんな彼らが、それ以上の欲を出すわけがなかった。

昂とエミリオはその案に喜んで承諾し、罪人の烙印を押されている立場なのも構わず孤島へと放り投げられた。

そこには本当に何もなかった。時々違法船が通り過ぎたり、上陸しようとしていたが、邪魔をするものとみなされそれらは例外なく皆殺しにされた。

その孤島は、ちょっとした都市伝説にもなっている。

近づけば殺されるという、ありきたりな都市伝説。

そこにいるのは、狂った愛情に支配された二人が、「幸せに」暮らしているだけなのに。

二人は、ずっと幸せに暮らしていた。

彼らの大敵（後書き）

終わったー！！ ヤンデレ×ヤンデレがついに終わったー！！ 長
かったー…… なんにせよ、連載をちゃんと完結できてよかったで
す。ここまでお付き合いくださり、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6280q/>

君だいなり世界

2011年8月13日03時27分発行